

いつか帰るその日を信じて…

岐阜大学教育学部附属中学校 3年 古川 慧一

足を引きずって歩く男がいる。一見亡霊のようだ。もちろん亡霊ではないが、服はボロボロ、全身には無数の怪我が見られる。だが、彼はある場所を目指していた。あの暖かな日差しの差す家へ…。愛する人がいる家へ…。

時は一九四二年。ヨーロッパでは連合国と枢軸国が対立し、戦争をしていた。しかし、兵士は既に疲弊し、フランスでも徴兵制をとることになった。カロルドはフランス西部に妻と子どもで住んでいた。戦前には彼らは裕福な暮らしをしていたが、カルロスもまた、徴兵されて戦争の前線で戦うことになってしまった。もちろん彼は嫌だったが、国に逆らったらどんな目に遭うか分からなかったし、フランスでは当時兵士の士気を高めるため、あるルールを作っていたこともあり、断腸の思いで、行くことを決めた。ルールは「戦地で十人敵を殺せば帰還できる」というものだった。しかし、彼は銃も握ったことも、人を殺したことも無い戦争の素人だった。

彼は死なないため、そして早く帰るため、必死に銃の扱い方を学んだ。しかし、最初の一月は一人も殺せなかった。そのせいで、部屋が隣の兵士には、

「お前、食料食いに戦地に来たのかあ?。」

と、皮肉を言われた。他の兵士は、もうすでに敵を何人も殺しているようだ。そして上官のムスカ大佐によると、すでに何人かの兵士は帰還したという…。

二ヶ月目。彼は初めて一人敵を殺す事が出来た。引き金は思っていたほど重くはなかったが、敵の血の臭いに不快感を覚えた。でも、やっと家に帰る第一歩を踏み出せた、と思うと本当に嬉しくて堪らなかった。隣の部屋の兵士は、貴重な酒を勧めてきた。

三ヶ月目に入ると彼は戦地にだいぶ慣れ、この月には四人も殺した。ただ、隣の部屋の兵士

今はもう居ない。彼は自分より強いので、もう十人殺したのだろう…。すでに帰還したようだ。急だったので、名前を聞いておけばよかったと今更ながら思った。隣の兵士のように帰還する時の事を考えると心が躍った。一方彼は気づいていなかったが、元々いた顔が減り、新しい顔が増えていた。

その年のクリスマス。隣で戦っていた兵士が流れ弾にあたって死んでしまった。こんなに近くで人が死ぬのを見たことはなかったので、急に死の恐怖を意識して怖くなった。ふと空を見上げると雪が降っている…。仰向けになって白い雪雲を見上げた。あと二人で…。

それから約三週間が過ぎたある日、来るのを切望していた日がやっと訪れた。ついに十人殺したのだ。上官のムスカ大佐の部屋に飛び込むように入り、それを説明した。しかし、ムスカ大佐は、

「ああ…冗談言わないでくれ。兵士一人でも帰ってもらおう余裕なんてないんだ。君は帰れない。ここで多く敵を殺して死になさい。」

と怒鳴った。彼は腸が煮えくり返る思いがして、無言で部屋から立ち去った。廊下から聞こえる無機質で冷たい足音を聞いて、ムスカ大佐は胸が痛んだ。帰りたい…、と。

その後、カロルドはベッドの中で考えた。そして決意した。この地獄から抜け出す、と。

彼は、真夜中に基地を抜け出した。緊張しすぎて、心臓の音で敵に見つかってしまうのではないかと本気で考えるほど怯えていた。ドアをそっと開けたら外は雪が降っている。見上げる鉛色の空がどこまでも続き、何もかもが、その虚空に飲み込まれそうだった。すると、ふと目の前に人影が見えた。彼の心臓は飛び上がった。その影はムスカ大佐だった。ムスカ大佐は拳銃を抜いて、ゆっくりと彼に銃口を向けた。そして、

「長い間よくやってくれた。今まで、苦勞。」

とだけ言い、引き金に指をかけた。そして…。ドンツ、という音と共にムスカ大佐は倒れた。カロルドはこっそり抜いて敵を撃ち殺した拳銃をしまうと、転がっている敵の拳銃を奪って駆け出した。死ぬ寸前のムスカ大佐の

「銃弾は大事に使え…。何かあったときには必要だからな。」

という声は永遠に誰にも届くことはない…。

道の横には死体が転がっていた。それは、自分の隣で流れ弾に当たって死んだ兵士に似ていたが、彼は一瞥しただけで地獄を駆け抜けた。彼は、いつからか雲の隙間から差す月明かりを見つけた。かすかな月光は、それでも彼の進む道の先を照らしている。永遠のような距離でも、必ず辿り着いてみせる、と爪が手に食い込むほど拳を強く握った。

あの家が見えた。彼は力を抜くと折れてしまいそうな膝に、最後の力を入れる。空からは春の陽光が降り注ぐ。それは彼の心を融かして優しく包んでいった。彼はドアの前まで行くと、ドアを思いつき叩いた。その音は、どこまでも広がる蒼穹を駆けていった。